

平成19年度香小研国語部会研究テーマ

香川県小学校教育研究会国語部会

1 平成19年度の研究テーマについて

(1) 研究テーマ(案)について

国語力の見極めとその指導・評価の在り方を求めて
考える力を育てる学びの構築

PISA2003の読解リテラシー結果(前回の8位から14位へ)は、私たち教師だけでなく、日本国民に大きな衝撃を与えた。文部科学省は国立教育政策研究所と協力し、すぐさま「PISA・TIMSS 対応ワーキンググループ」を設置し、「読解力向上プログラム」をとりまとめた。最近では、我が国の子どもたちにも PISA 型読解力を身に付けさせようと、PISA2000発問課題が分析されたり、PISA2000、PISA2003の読解力が2回連続世界第1位であったフィンランドの国語教科書発問課題を分析したりしている(初等教育資料平成18年7月号)。去る4月24日に行われた全国学力・学習状況調査の国語Bは、まさに PISA 型読解力を問う問題であった。

香川県教育委員会も香川型指導体制・研究委託事業の推進、学力向上フロンティアスクールやステップアップスクールの指定を始めとする様々な事業に取り組んでいる。

そして、香小研国語部会も上記の研究テーマの下、昨年度は「考える力」の育成に重点を置き、夏季研修会、秋の香小研大会、四国大会等を通して理論・実践提案等を行った。

しかし、そもそも「考える力とは、分析力、論理構築力などを含む、論理的思考力である(文化審議会答申)。」ことから考えると、平成18年度以前に提案された実践も「考える力」を育成していたのだと思う。多くの時間を費やさなければ育たないという「考える力」の特性に鑑みると、昨年1年間だけでなく、これまでの実践を集大成することで、長期的な展望に立つて「考える力」を育成していくことができるかも知れない。

そこで、平成10年度～平成18年度までの実践提案を整理してみることにした(夏季研修会、香小研大会、四国大会のうち、入手できた資料)。 プレゼン参照

学年間、領域間に偏りがあることがお分かりいただけたと思う。これは、ある意味で仕方がなかったのかも知れない。例えば、「夏季研修会は7月末なので、2、3月の単元はやりにくい。」「郡市の代表だから小単元の実践発表では…。やはり、大単元の実践を…」と考えるのは自然であろう。しかし、先にも述べたように、長期的な展望に立つことの必要性を考えると、やはり学年や領域が偏ることは望ましくないのではないだろうか。

また、今年になって第3期教育課程審議会のとりまとめ、教育再生会議第二次報告が出されたが、次期学習指導要領の方向性も今だ審議中である。このような現状において平成19年度は、昨年の研究主題、サブテーマをそのまま踏襲して、「考える力」を育てる学びを広く蓄積していく年としたいと考えたのである。

(2) 研究の切り口(研究内容)について

研究の切り口については、「目標レベル」「教材・単元レベル」「学習指導レベル」「評価レベル」と、「常時活動・トピック単元の開発」を踏襲したい。

目標レベル

中教審答申(平成17年10月26日)

「義務教育の目標を明確化するため、学習指導要領において、各教科の到達目標を明確に示すことが必要である。」

審議会経過報告(平成18年2月13日)

「学校教育の目標を明確化するため、特に義務教育については、国が各教科の到達目標を明確に示すことが必要である。」

【例】(教育課程部会資料より) 9/29第34回

- ・ 体験から感じ取ったことを表現する力(感受表現)
日常生活や体験的な学習活動の中で感じ取ったことを言葉や歌、絵、身体などを用いて表現する。
- ・ 情報を獲得し、思考し、表現する力(読解論述)
文章や資料を読んだ上で、自分の考えをA4・1枚(1,000字程度)で説明する。

到達目標の明確化

現段階では、次期指導要領に明示されるのか、学習指導要領とは別の資料で示されることになるのかは未定である。また、示されるとしても指導事項の全てについて記載することは不可能である。ということは、私たち自身が到達目標を設定していくという研究も重要になってくると思われる。

なお、初等中等教育分科会教育課程部会国語専門部会では、次のような視点により目標・内容の改善を図ってはどうか検討しているところである。

- ・ 言葉によって適切に理解し表現するための「言語の技能」の視点
- ・ 言葉によって理解し表現する基礎となる「言語の知識」の視点
- ・ 言語に親しみ、日常的に読書や表現の活動をする「言語の文化」の視点
- ・ 課題解決のために、論理的思考力を生かし言語を運用する「言語の活用」の視点

教材・単元レベル

教材ということばは、いろいろな意味で使われることがあるが、ここでは「教師が意図的に用意したもので、クラスの個性やそのときどきの条件に左右されず、一定の成果を上げることのできるようなもの(資料・活動・発問・形態など)」と定義しておく。

「子どもの実態が異なるのだから、どの学校でも一定の成果を上げることのできるようなものなどないのではないか。」

と、考える方がいるかも知れない。

確かに、個別的な条件によるある程度の成果の揺れはあるかも知れない。しかし、ここで言っているのは、そのような揺れを前提として含んでも、なおかつ一定の成果を上げることができるようなのなのである。例えば、低学年の文学作品の読みにおける「紙芝居づくり」は、子どもに場面分け意識を持たせることができる。これは、ほぼどの地域で実践しても、同様の効果をもたらす教材なのである。

そのような個々の教材を学習のひとまとまりとして組織すれば、単元化ということになる。

到達目標を具現する教材開発，単元開発

学習指導レベル

教材開発・単元開発の成功は、必ずしも授業の成功を意味するものではない。実際の授業場面で子どもの発言の組織や板書、指名の順序等の適切さが授業の成否を左右する。

このレベルでの支援を個別に挙げていっても、クラスの実態や学習状況によって別のクラスでは効果が見られないことは往々にしてある。したがって、このレベルの研究は、個別の支援を挙げていくことよりも、効果のあった支援に共通する原則や構造を見出すことになる。

きめ細かな支援の在り方

評価レベル

評価項目，評価規準，評価方法等の研究である。これらの内容は、領域によって異なってくるであろうし、数値的な評価と解釈的な評価をどのように組み合わせていくかも重要な問題である。

最近、学校の自己評価等で、数値だけでなくプロセス評価を加味することが重要であると言われるようになってきているが、教育現場における「研究課題を設定し、仮説を設け、いくつかの授業研究・授業討議を行い、その成果と課題をまとめる」といった研究方法は、何十年前から変わっていない（授業後アンケートやペーパーテストを行うなどの数値的データを加味することは最近多くなったが）。数値的な評価と解釈的な評価をどのように構造化しながら研究を進めていくのが望ましいかということは、いつの時代も我々の悩みだったのである。

評価項目，評価規準，評価方法の改善

2 研究内容

研究テーマ

国語力の見極めとその指導・評価の在り方を求めて
考える力を育てる学びの構築

目標レベル	<p style="text-align: center;">到達目標の明確化</p> <p><u>発達段階に応じた到達目標の設定</u> 幼稚園と小学校の接続，小学校と中学校との接続も視野に入れた国語力の吟味を行う。</p> <p><u>具体的到達目標の設定</u> 各領域の特性に応じ，指導事項をより具体的な目標として設定する。</p>
教材・単元レベル	<p style="text-align: center;">到達目標を具現する教材開発・単元開発</p> <p><u>到達目標を内包した教材（言語活動）開発，単元開発</u> 子どもたちに身に付けさせたい国語力を内包した望ましい教材（言語活動）を開発したり，複数の教材群をどのように配列すると効果的に目標を達成できるかを明らかにしたりする。</p> <p><u>学年の系統性を重視した教材（言語活動）配列</u> 同一，または同系列の言語活動が学年が進むにつれ，どのように発展していくことが望ましいのかを明らかにする。</p> <p><u>領域間の関連指導</u> 領域間の関連を図る指導はどうあればよいのかを明らかにする。</p>
学習指導レベル	<p style="text-align: center;">きめ細かな支援の在り方</p> <p><u>子どもの思考・認識を深める反応の組織</u> 子どもの反応に潜在する価値を顕在化させたり，子ども相互の関わり合い，吟味力を高めたりする，教師の具体的な指導力の向上を図る。</p> <p><u>子どもの思考・認識を深める板書</u> どのように板書すれば，子どもの認識が深まるのか。領域や言語活動の特性に応じた板書の在り方を探る。</p> <p><u>子どもの思考・認識を深めるノート指導</u> ノートに書くことを通して子どもが思考し，学習内容の定着を図ることができるような指導の在り方を探る。</p>
評価レベル	<p style="text-align: center;">評価項目，評価規準，評価方法の改善</p> <p>一人一人を適切に評価し，支援へと生かしていく評価項目，規準及び，評価方法を明らかにする。</p>
<p>常時活動・トピック単元の開発 朝活動の在り方，授業におけるトピック単元の開発を行い実践を交流する。 (論理的思考力・想像力・言語感覚・読書・漢字・暗唱・敬語等)</p>	

3 研究方法

(1) 夏季研，香小研大会，四国大会，郡市の研究会の実践の蓄積 将来的にはweb公開へ

実践における学年，単元（領域）のバランスの確保

実践，提案等を視覚化することにより，学年間，単元間のバランスが見えてくる。それをトータルとしてのカリキュラムを実践していくことで国語力が身に付くという考え方に立って眺めてみると，実践研究が不足しており，今後実践を蓄積していく必要性のある学年や単元がはっきりしてくる。

副次的な効果

本年度は広く実践を蓄積することを目標としているが，ある程度の実践が蓄積された後には，以下のような副次的な効果も生まれる。

実践の縦への継承

昨秋，香小研大会が国分寺北部小学校で開催された。3年間をかけた骨太の実践であったと思う。提案された内容のうち，これからも受け継いで行くべきものはどれで，これからさらなる改善を加えていく必要があるものはどれか。これらのことを明らかにしておかないと，これから後，以前に提案されたていことが再び提案されたり，その実践には問題点があることが以前に指摘されていても，それを知らなかったりするということが起こってしまうであろう。

成果と課題が明らかにしておくことで，今後，同単元を実践する場合には，そこでの成果と課題を踏まえることが必要になってくる。

実践の横への継承

ある郡市研での研究授業を通して提起された成果や課題は，他の郡市の先生方へと継承されているだろうか。あるいは，香小研国語部会の取り組みは，国語部会員以外の先生に継承されているだろうか。

広く公開することによって，上記の問題も解消される。

教育と比較されることの多い医学の世界では，これまでの医学に関する理論，処方箋を踏まえることは鉄則である。医学の進歩は，決してこれまでの土台を無視して成り立つものではない。そうしないと，人命に関わることもあるからである。

教育の世界はどうであろうか。この辺りの甘えが私たち教師にあるのかも知れない。

しかし，逆に考えてみると，これからの教育実践が先行実践の成果を継承し，課題を改善した形で提案され，それが，縦にも横にも継承されていくような形で共有化されていくのであれば，香川県全体の国語科授業の底上げを図ることができるのではないか。

国語力向上に関する取り組みが盛んに行われている今こそ，それらの取り組みが今後，縦に横に継承，改善されながらよりよいものへと構築されていくような研究の在り方を模索していく必要があるのではないだろうか。

月	年 間 の 見 通 し		
4	夏季研で提案する単元等の決定。	<Web 構築の準備> 予算 プロバイダ検討。 実践発表における規定作成	
5	総会・理事会 ・ 研究主題，研究方法等 ・ 各都市の提案単元・学年の周知 ・ 「実践発表・提案における仮規定」周知・・・これを基に資料作成		
6	夏季研の打ち合わせ		
7	夏季研		
8	夏季研で発表した資料，成果と課題をデータで事務局へ		
9	夏季研の反省 「実践発表・提案における仮規定」の修正（HP運用規定を加味） 国語科教育43号「郡市の研究のあゆみ」		規定（案）検討 平成10年度～の 実践をデータ化
12	来年度の研究について 各都市の研究（指導案，討議記録等）をデータで事務局へ		
2	来年度の研究について		

(2) 平成19年度の夏季研修会

日時 平成19年7月27日(金) 9:00～16:00
 場所 アイレックス(丸亀市)

(3) 四国大会は19年度はありません。

(4) 研究冊子「国語科教育43号」

(5) 香川県検証改善委員会

香川県教育委員会義務教育課からの委託。全国学力・学習状況調査の結果を分析・活用し，学校改善につながる「学校改善支援プラン」を作成する予定。